

# 折口信夫の明日香〔1〕

植村和秀

2017年度研究会論考

## 【要旨】

折口信夫の心のふるさととは、明日香であった。釈迦空の名で歌人として名高く、国文学者、民俗学者として著名で、『万葉集辞典』や『古代研究』といった著書を出しているのだから、これは当然にも思われる。しかし実は、折口の母方の祖父が、明日香村の出身なのであった。祖父にあたる造酒ノ介は、嘉永5（1852）年に折口家へ養子に入るに際して、実家の岡本家から一度、飛鳥坐神社の飛鳥家の養子となり、それから折口家に入ったのである。医師として人間として、大変立派であった祖父への尊敬の念は折口に非常に強く、その生涯の心の支えとなった感がある。

そして折口は、門下生や学生とともに、何度も明日香村を訪ねている。國學院大學教授と慶應義塾大学教授の2つを兼ねる折口は、彼らに、現地を訪問して自らの心に感動を持つ

よう指導していた。それが歌となり、研究の動機となるからである。

折口のように、大和に特別の思い入れを抱いた人は多くいた。そのような人たちの思いを集めて、奈良からの思想史を作っていくことは、今、必要なのではないだろうか。

キーワード

折口信夫

明日香

万葉旅行

思想史



折口信夫肖像

提供：國學院大學折口博士記念古代研究所

## はじめに

ほす、きに夕ぐもひくき明日香のやわがふる里は  
ひをともしけり（※註1）

折口信夫（1887～1953）の心のふるさと、明日香であった。折口は、釈迦空の名で歌人として名高く、国文学者、民俗学者として著名な人物である。その全集には、国文学、民俗学の他、国語学、和歌史、神道論、国学論、芸能史、短歌評論、近代文学評論などの著述が収録され、歌の他に、詩や小説、戯曲なども収録されている。その活動はあまりに幅広く、全体像のとらえにくい生涯となっている。

さて、折口の代表作『古代研究』全3巻である。昭和4（1929）年から5（1930）年にかけて大岡山書店から出版されたこの著作は、「をりくち」の名前が背表紙に金文字で入り、国文学篇1冊と民俗学篇2冊で構成される。そこには折口独自の創見が、文献や民俗の調査も踏まえて多角的に組み込まれており、読む人を魅了しつつ戸惑わせる。あまりにも情熱があふれすぎて、混み合った印象を読者に与えてしまっからである。

折口は情熱の人であった。大阪の木津で生まれ育ち、早くに文学や演劇、国学に親しむ家庭環境にあった。医業を業とする家であり、家人は医者になることを望んだものの、折口

には、文学と国学への志をあきらめることができなかった。天王寺中学校（現在の天王寺高校）を卒業後、東京の國學院へと進むことを決意し、実行した。明治38（1905）年のことである。

そして本を読み、宗教活動に関心を深め、国学を学び、歌を詠む中から、短歌結社の『アララギ』との関係ができていく。万葉集研究者としての折口は、万葉集を重視する結社から歓迎され、大正6（1917）年には選歌欄を担当する。ただ、どこまでも突き進む折口の情熱は、やがて『アララギ』と作歌の方針を異にするようになり、折口は結社を出て独自の道を歩むこととなる。

その中で折口は、「万葉びと」という呼び名を用いて、「万葉集を通じて見られる古代人の内的生活」を「その推移と伝統・展開」も含めて研究の重点対象とした（※註2）。古代人の生活に愛着を感じ、その心情に自らの情熱を注ぎ込んで研究を深めていった折口が、『万葉集辞典』を刊行したのは大正8（1919）年のことである。

## 古代人への思い、祖父への思い

古代人の生活に対する折口の熱意は、その主著である『古代研究』にあふれている。なお、ここで折口が古代と呼ぶ対象は、古代人にとっての古代も含まれる。はるか昔の昔に到る

まで、折口は、その探求の情熱を燃やし続け、その当時の人々の内的生活の心情をもつかみ取ろうとした。折口からすれば、そこに文学的創作の秘密があり、新しい文学を未来に発生させるために、非常に参考になるはずなのである。

それではなぜ、これほどまでに、折口は古代に愛着を持つのであろうか。折口が生まれ育つたのは、大阪の木津である。ここは難波の南、天王寺の北西に当たり、大阪市営地下鉄の大国町駅から北西に徒歩すぐである。本願寺と織田信長の合戦の場所も近く、実際、本願寺のために働いた由緒が折口家には伝えられている。

しかし、ここは古代的な土地とは言いがたい。また、折口自身、自らの「古い町人の血」（※註3）を強く自覚していたように、農村でもない。斎藤茂吉が折口の歌の力弱さを批判した際、折口は、むしろ町人の立場を強く押し出した。「田舎人ばかりが、力の芸術に与ることが出来て、都会人は出来ない相談だと迄、わたしは悲観して居ません」（※註4）折口はこう述べて、万葉集を重視し、力の芸術を求めることについて、独自の立場を表明する。そして、この茂吉への反論の中に、大和が出てくるのである。

「わたしは都会人です。併し、野性を深く遺伝してゐる大阪人であります。其上、純大和人の血も通ひ、微かながら頑固な国学者の伝統を引いてゐます」（※註5）

折口にとって大和は、祖父の故郷であった。折口の母方の祖父である造酒ノ介は明日香村の出身であり、嘉永5（1852）年に折口家へ養子に入ったのである。なおその際、実家の岡本家から一度、飛鳥坐神社の飛鳥家の養子となり、その上で折口家に入っている【下写真】。医師として人間として、大変立派であった祖父への尊敬の念は、折口に非常に強く、その生涯の心の支えとなった感がある。

明治十八年の、これらに、果てし 唯ひとりの  
医師として、祖父の記録を見出づ

半生を語らぬ人にて過ぎにしを 思ふ墓べに、  
祖父ををがみぬ（※註6）

折口の生涯は旅に旅を重ねるようなものであった。それは、学術的な調査のためでもあれば講演のためでもあり、また、文学的創作のためでもあった。そして、折口の晩年に同居し、戦後の旅に随行した岡野弘彦は、折口の旅行カバンがその祖父の記念のものであったと回想している。コレラ流行の中で職務に殉じた祖父のために、診察を受けた人たちが遺族に贈った特製品だったのである。（※註7）

それから60年以上も経過して、折口はそのカバンを使い続ける。カバンを通じて折口は祖父の生き方



飛鳥坐神社  
提供：飛鳥坐神社  
／明日香村教育委員会

に触れ、祖父を通じて日本の古代の原郷に心通わせることができる。

木津と明日香はそれぞれに、祖父の生涯とつながる土地であり、どちらも折口のふるさとであった。ただ、その歌と研究にとつて、直接に関係の深かったのは、明日香の方だったのである。

### 明日香への愛着

折口は、祖父の故郷である明日香を、門下生や学生たちとともに何度も歩いていく。國學院大學教授と慶應義塾大学教授の2つを兼ねる折口は、現地を訪問して自らの心に感動を持つよう学生を指導していた。それが歌となり、研究の動機となるからである。大学進学後は東京に住み、東京の大学で教えてきた折口にとつて、古代人の生活の重要な舞台を実際に歩くことは、おそらくどうしても必要なことであった。そしてその訪問を、心から楽しんでいたように思われる。

明日香風 きのふや千年。やぶ原も アラスガヤマ 青菅山も  
ひるがへし吹く

なつかしき故家フル、への里の 飛鳥には、千鳥なくらむ  
このゆふべかも (※註8)

ちなみに、昭和5(1930)年5月に慶應義塾大学の学生たちを引率した万葉旅行の行程は、以下のようなものであった。参加者は、折口、波多郁太郎助手、国文科の学生他で合計22名である。参加した新入生の日記を引用してみよう。この日記は、ご家族が小説化した伝記作品の一部となっている。

「十二月」夜、十一時半、横浜駅出発。

十三(火) 十時京都有着。京都、三輪山、椿市、長谷寺、多武峰とうのみね一泊。

十四(水) 多武峰、上市村、妹背山いもせやま、吉野山、岡寺宿。

十五(木) 橘寺、飛鳥川、高市郡、飛鳥、朝廷跡、藤原氏跡、耳成みみなし、畝傍うねび、香久山かぐやま、当麻寺泊。

十六(金) 当麻寺、高田町、宇治平等院、京都嵐山泊。

十七(土) 大阪叔父会見、心齋橋、道頓堀、難波神社、天王寺、中ノ島公園、京都石山寺一泊。別離宴。

十八(日) 石山寺、琵琶湖、近江八景三井寺、京都、早慶戦ラヂオ、新京極しんきょうごく、祇園ぎおん、七時半京都発。

十九(月) 朝七時保土ヶ谷着、無事。(※註9)

この新入生の名前は宮本演彦、横浜の出身である。宮本は、「大和朝廷時代、奈良、平安朝時代の文学の舞台として、漠然と抱いていた概念が、確かなものになった」と記し、この旅行の成果の第一として（※註10）。その後、昭和7（1932）年に第2回の万葉旅行が企画され、10名程度が参加したようである。波多の日記には、10月28日から11月3日までの旅行内容が詳しく記載されており、今度はこちらを引用しよう。なお、波多は東京の出身であり、29日の宿泊は多武峰であった。

三十日（日）九時頃先生は飛鳥に先発された。社に参り、岡寺道にかかる。尾曾あたりの家の軒下に燕の巣がつくってあった。細川を経て上居にかかった頃、先生にあい、みやこ塚を見学。中に入るとまだ石棺が存している。阪田に近く二階造りのお宮のあったのは珍しい。石舞台を見、岡寺、治田神社に詣り、酒船石、飛鳥寺によつて、飛鳥さんのお宅に至る。昼食後、神南備山に上る。秋は色彩も豊富だが、展望もさく。豊浦寺趾により、海道をそれて、田中、御坊を経て、東口から畝火山に登る。相変らず路が峻しい。はや五時を過ぎて、神宮の閉扉の太鼓をきいた。三輪山の輪廓が夏ほどはつきりしないのは物足りない。下つて神宮に詣り、駅前から自動車で好生館に至る。

三十一日（月）昨晩は余程の雨だったらしいが、次第に上つた。朝飯前橋寺、川原寺にまいる。八時過ぎ、宿を出る。飛鳥さん

が案内に立たれた。祝戸から坂田にゆく道と別れて、飛鳥川に沿うて稲淵に向う。龍満寺の竹野朝臣の墓、及び南淵先生の墓に詣る。それより飛鳥川上坐（日記白紙。宇須多伎比売）神社傍の飛鳥さんの新宅に休む。この辺は、飛鳥川の眺めも美しい。栢森の（日記白紙。賀夜奈流美神社）に詣り、芋が峠の登り口で飛鳥さんとお別れした。峠を越え、千股を経て、上市に出る。宮滝まで自動車。水が涸れてさびしいかんじがした。四時すぎ、所謂、象谷にかかった。途中、先生の足が愈々苦痛を訴えられ出したので、二人残った。上千本に来た時は、とつぷり暮れていた。僕の眼の悪いことを頻りに口にされる先生の負け惜しみ。漸くにしてケーブルカーの口に至り、さ、こやに泊る。（※註11）

### 折口の大和

こうして多数の学生を引率し、いろいろな苦勞があつても、折口は何度も明日香にやつて来た。現地を訪問調査することは、国文学専攻の学生にとつて有益なことであるし、まして関西出身者以外であれば、その効果はたしかに大きい。教育者としての折口の見識の高さを示す企画である。

さてそれでは、折口の明日香への愛着は、その思想の全体の中でどのような位置を占めているのだろうか。さらにまた、大和はどのような位置を占めるのだろうか。歌人としても、国文学者、民俗学者、国学者、神道学者としても、明日香や

大和は、折口にとって特別の意味を持つ。逆に言えば、折口の幅広い活動の多くが、この土地につながっているのである。

ちなみに、折口の実家近くの大阪阿部野橋駅から近鉄南大阪線に乗れば、特急なら35分ほどで橿原神宮前駅に着く。明日香はすぐ近くである。その途中には当麻寺駅があり、駅からほど近い当麻寺は、折口の小説の代表作『死者の書』の舞台であった。つまり、小説家としての折口も、大和につながるのである。

やすらなる息を つきたり。大倭 山青垣に  
風わたるなり(※註12)

大和々々われは忘れじ母が背にさすらひ出でし山めぐ  
る国(※註13)

折口のように、大和に特別な思い入れを抱いた人は多くいた。そのような人々の思いを、改めて取り上げ、その意味を問いなおすことができるのではないだろうか。それは、近世から近代にかけての奈良県が、日本思想史上にどのような意味を持ったのか、という問いである。

奈良県出身の人々だけでなく、奈良県と関係の深かった人々、あるいは、奈良県にあらがれた人々の思いもあわせて発掘し、そこから、奈良の意義と魅力を再発見していくことは、

とても興味深く、また、今とても必要のように感じている。

奈良からの思想史という試みには、可能性と必要性が隠されているように思われてならない。

(以下、次回へ続く)



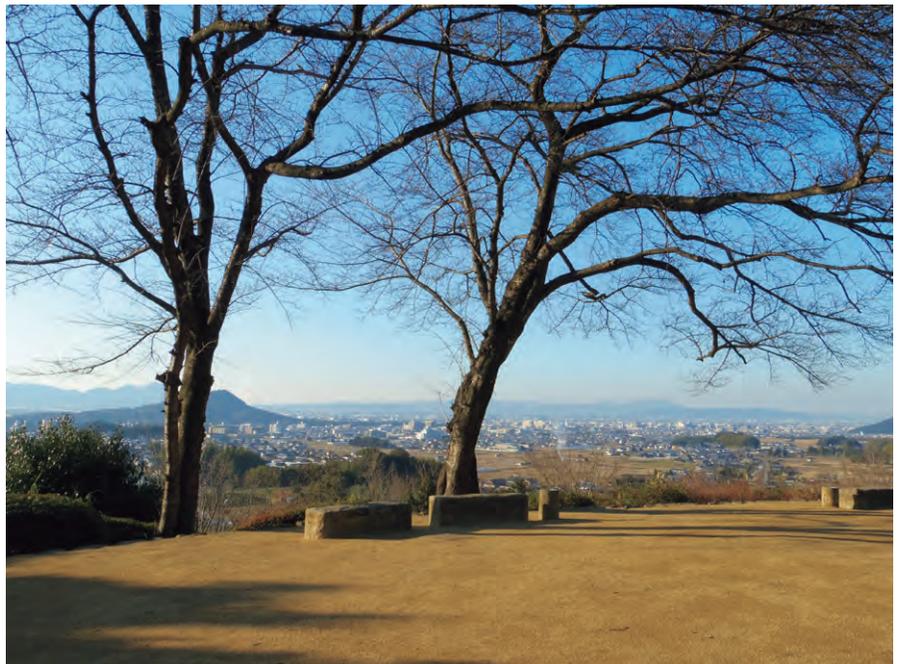
うえむら・かずひで

1966(昭和41)年京都府生まれ。京都大学法学部卒業。京都産業大学法学部教授・奈良県立大学ユーラシア研究センター客員研究員。専門は政治思想史。『昭和の思想』(講談社選書メチエ)、『日本のソフトパワー』(創元社)、『ナショナリズム入門』(講談社現代新書)、『折口信夫』(中公新書)など著書多数。



## 〔註記〕

- 1 折口信夫『折口信夫全集』第25巻、中央公論社、1997年、379頁。
- 2 『折口信夫全集』第6巻、1995年、49頁。
- 3 『折口信夫全集』第3巻、1995年、463頁。
- 4 『折口信夫全集』第29巻、1997年、103頁。
- 5 『同』104頁
- 6 『折口信夫全集』第25巻、111頁。
- 7 岡野弘彦『折口信夫の晩年』、中公文庫、1977年、164頁。
- 8 『折口信夫全集』第24巻、1997年、110頁。
- 9 北村薫『慶應本科と折口信夫いとま申して2』、文藝春秋、2014年、141～142頁。
- 10 『同』、142頁。
- 11 池田弥三郎『わが幻の歌びとたち 折口信夫とその周辺』、角川選書、1978年、71～72頁。
- 12 『折口信夫全集』第24巻、368頁。
- 13 『折口信夫全集』第25巻、226頁。



甘櫛の丘(明日香村)から臨む大和三山  
 撮影：編集者